

A black silhouette of an acoustic guitar is centered on the page. The headstock is at the top, and the body is at the bottom. The sound hole is a circle with vertical lines. The text is overlaid on the guitar's neck and body.

月光町

ブルース

武田久生



武田久生作品集・もくじ

月光町ブルース……………4

ホラ吹き松吉……………47

あとながき……………219

## 月光町ブルース

乾いた風が吹いていた。夏も終わりの昼下がりに。

大型トラックが、時折、毒ガスをそんな風の中に混入させて、どこかへスピードを上げて走り去っていく。

公園の砂場の縁には、「プロ」という異名で通っている若い男が、啜え煙草で座っていた。

「これが最後の一本やな……」

「プロ」は、煙草のフィルターを少し強く噛み、肺の中一杯に白い煙を充滿させていく。燃え尽きた灰の塊は、煙草の先端で原型を保てなくなり、ポロリと下方へ落下した。足元に広がる砂場の中にダイブした灰の塊は、ライブのときの「プロ」自身の姿を彷彿とさせた。

ディーブ・パープルの「スモーク・オン・ザ・ウォーター」という曲がなんとなく「プロ」の頭の中に浮かんだ。「プロ」は衝動的にその曲を歌いたくなくなってきたが、タイトルが「スモーク・オン」から始まるのだったか「スモーク・イン」から始まるのだったか良くわからなくなり、結局、煙のようにモヤモヤした思いを抱えたまま、イントロを数フレーズ口ずさむだけにした。

「CからC7への展開が、おれ、めっちゃめっちゃ好きやねんなあ……」

誰にでもなく唐突に眩くと、「プロ」は、飲みかけの缶ビールを砂場に埋め込んで固定させ、それから、スーパード万引きしてきたマグロの切り身の隣で、今の今まで横になり、眠っていたかのような五弦ギターを膝上に手練り寄せる。

「この数十分間を有効活用して寝とったんか？ それ、マイクロスリープっちゅー奴やん。昨日のミクシーニュースに載ったあの記事、お前も読んでっつてんか？」

「プロ」は、バンド仲間に語りかけるかのように、そう五弦ギターに尋ねる。短パンの上にベストポジションを探し当ててやり、適当にコードをいくつか弾いてみる。チューニングは微妙に狂っていた。しかし、面倒臭かったので、「プロ」は、そのまま弾き始めることにした。

一弦は三か月前から切れっぱなし。今日、パチンコで五万円負け、出費を抑える必要性に「プロ」は迫られていた。

「またしばらくの間、この五弦ギターがおれのスタイルになるんやろうなあ……」

と、「プロ」は半ば呆けたような表情で夢想していた。

たった数時間で失った金額のことを想うと、小さな苦悩が心の中に生じてくる。しかし、溜息を宙空に解き放ち、「プロ」はそれを昇華することにした。それから、左手の指をC#mの形に変えた。

遠くで揺れる影に

気付いて慌てて逃げた

君と手繋いで遊ぼう  
夜と手繋いで遊ぼう

「も〜いい〜か〜い？」

新しくもあり懐かしくもある  
僕らはきつと夢の途中  
時計の針など狂わせ

ゆらゆら提灯が

商店街彩って綺麗だな

赤青黄色

サイダー飲んで花火が終わって

商店街を二人で歩いて行く

祭りの後の静けさに酔う

路地裏で泣いてる子供が泣き止んだ

後ろの少年誰だ

後ろの少女は誰だ

「帰っておいで」と声がした

都会の夜に溶けて  
汚れてしまった僕を  
許してくれる女の子  
許してくれる下町がある

さあ、行こか  
新しくもあり懐かしくもある  
僕らはきつと旅の途中  
明日天気になれ

サイダー飲んで花火が終わって  
商店街を二人で歩いて行く  
祭りの後の静けさに酔う  
路地裏で泣いてる子供が泣き止んだ  
後ろの少年誰だ  
後ろの少女は誰だ  
「帰っておいで」と声があった

カワサキプロ「SHITAMACHI-GAL」より

気付くと、「プロ」が目の前に広げていたギターケースの中に、百円玉を投げ込んだ少女がいた。自転車に跨って、どこか疲れた様子で佇んではいたが、その表情には満面の笑みが張り付いている。

「いい曲ですね。ご自分で書かれたんですか？」

「おれ以外の誰がこんな素晴らしい曲を書けるんやちゅー話やね。でも、百円、ありがとうな」

「いつもこの時間は、ここで弾き語ってらっしゃるんですか？」

「今日はたまたまや。パチンコで超負けてな、むしゃくしゃしとって自棄酒始めて、酒の肴に音楽を、みたいなノリんなって、で、弾いてみとっただけや。ちょっと寒いし、ほんまはもう帰ろう思ててん」

「じゃ、じゃあ……、この後はオフですよな？ 初対面の人にこんなこと言うのって、とつても気が引けるんですけど、私の頼みを聞いて頂くこと、できないでしょうか……？」

「なんやねん……。それを受ける、受けへんは、内容を聞くまでは答えられへんよ。先にゆうとくけどな、おれ、殺しは信仰上せーへんことにしとるから。でも、その頼みごとの聞く前に、煙草ある？ 今さつき、切らしてもーてん、おれ」

「わたし、心臓が悪くて……。煙草はだめなんです。ごめんなさい」

「そうなんや……。じゃ、我慢するわ」

「プロ」と少女が造り上げた沈黙の間に、乾いた風が、しばらくの間、纏わりつくようにして漂っていた。しかし、突然、二人に対する興味を一切無くしたのか、すっと上空へ吹き上がって消えていく。風の音に誘われたように、少女がその口を開いて語り出す。



「わたし、小さい頃から体が弱かったから、信州の方にある施設に入れられていたんです……。サナトリウムって言った方がわかりやすいかもしれませんね。リノリウムの床が至るところに貼られてあって、わたしと同じように身体の弱い子たちが、一緒にたにその施設に詰め込まれてたんですけど、みんなあの床の臭いがとても苦手でした……」

「その話、長くなるん？ こう見えても、おれ、めっちゃ多忙なんやけど」

「すっ、すいませんっ。単刀直入に言います。実はその施設で一番仲の良かった友だちから、今日、わたしに会いにこの町にやってくるって連絡が入ったんです。それで、月光町の駅まで、彼女を迎えに行くねって伝えたんですけど、実はわたし、この町に来てからまだ日が浅くて、駅に行こうと思つて道に迷っちゃったんです……。それで、頼みごとつていうのは、わたしを、その、駅まで連れて行ってくれませんかっ！ っってお願ひなんですけど……」

藁にもすがるような想いを載せて、少女の焦げ茶色の瞳が、アルコールで淀んだ「プロ」の瞳を強く射抜いていた。

「駅って、あの月光町の駅やろ？ こっからやったら、歩いて二時間はかかるんちゃう？ タクシィ乗られへんの？」

「友だちは元気なわたしの姿を想像してこの町まで来てくれるんです。だから、わたしもその期待に応えて健康な姿を見せてあげたいと思つて……。わたし、文明の利器みたいなものには極力頼りたくなかったんです。だから、自転車を選びました……。今、二時五〇分です。友だちがやつてくるのが、午後四時つて話だったから、まだ一時間ちよつとあります。わたし、意地でもその時間間に合わせたんですっ！」

語勢を強めて話し始めた少女の姿に、「プロ」は、確率変動を引き戻すために、何枚もの一万円札を投入し続けた数時間前の自分自身の姿をダブらせていた。

座っていた台がこれでもかというくらい大騒ぎを始めた直後のスーパーリーチ。効果音や赤や青や緑や黄色の光と共に、液晶画面両脇に大きく止まった赤色の「7」。黒い中折れ帽子を被った小太りの男が、能力を使用し、迫りくる巨大隕石の落下を食い止めることによって、「7」が中心にピタリと止まって揃う仕様になっているはずだった。しかし、その男は、あろうことかこの作業に失敗した。画面中央に止まったのは、無常観たつぷりの青い「6」。隕石は地球へ激突して人類は滅亡したのかもしれないなかったが、アドレナリンを脳内一杯に充満させた「プロ」の思考回路は、命の重さや、博愛主義なんてところには決して行き着かなかった。「プロ」の心中にあったのは、完全なる自己保存欲求だけだった。

「今まで突っ込んだ金額が四万円……。これを全て失うつちゅうことは、ある意味で、死や」

「プロ」は、この後訪れるかもしれない死刑宣告を先延ばしにするために、財布に入っていた最後の一万円札に震える手を伸ばした。

「お願いしますっ。お礼は何でもしますからっ」

悲痛な少女の顔を見ていると、「プロ」は、少女の頼みが、他人事のように思えなくなってきた。

よく飲んでいるときに、バンド仲間の中村が使う言葉が、ぽつと「プロ」の脳裏に浮かんできた。

「基本的に、男は女を抱いても一時や。三大欲求の一つを充足させたら、次にするんは他の欲求を満たすための行動や。せやけどな、時々、一度抱いただけで情が移ってもうて、どうも離れられへ

んくなつてまう女つちゆうのも、中にはおんねんな」

中村は適当な恋愛ばかりしているから、実際そうなんだろうと「プロ」は思うが……。確かにあいつのベーステクニクは抜群だし、悔しいが顔立ちもいいからモテるのも当然だ。だけど、それでセックスフレンドを何人も抱えて、あいつの魂は本当にロックだと言えるか？ 「プロ」は疑問だった。

中村の持つ情感や魂の本質についてはもちろんこの後も「プロ」によって疑問視され続けるべき問題だったはずだが、一旦、話を本筋に戻すために「プロ」自身心の揺れ動きに視点を戻そう。

心臓が悪いというのにも関わらず、親友と会うために、この少女はこれから自転車に乗って猛烈に飛ばさなくてはならない。かなりのマゾヒストやろ？ 自分……と、「プロ」は、一瞬、少女に言いたくなつたが、理性がその発言を止めさせた。どちらかと問われれば、「おれはSや」とこれまでも答えてきていたが、知らず知らずの内に少女に感情移入してしまっていたことも一因となり、最終的に「プロ」は、その苦行に自分も付き合つてやろうという心境に陥った。

「話はわかつたわ……。じゃあ、駅に着いたら、煙草こうてくれや」

「もちろんですっ！ 本当に、ありがとうございますっ！」

「プロ」は、静かにギターケースの中に五弦ギターを仕舞い、それを背負つて立ち上がる。ビールの残りを全て飲み干し、空き缶を地面の上で踏み潰し、金網製のゴミ箱の中に、マグロの刺身が入っていたトレイ、割り箸と一緒に放り込んだ。それから、後方のブナの木の前元を立て掛けられていた黒いママチャリの、車輪に掛けられていたチェーンを、懐から取り出したペンチで、破壊した。

「ところで、自分、名前なんてゆうん？」

「……。ユッコって言います」  
「ユッコか……。わかったわ。ほな……。いきまっせ〜」  
少女の方を振り向いて、「プロ」は、それから笑った。

\*

ユッコとミカは、福田サナトリウムの同期生だった。

ユッコが入ったのが、一一才の夏。一つ年下のミカは、その三か月前に入所していた。

ユッコは、人と目を合わすことのできない少女だった。視線恐怖症と医師からは診断されていた。常に第三者の視線が気になってしまい、その結果、誰の顔をもまともに見ることができなくなっていたのだった。

いつも通りユッコは俯いて、入居に關しての説明を聞いていた。所長の履いた皮靴は少し疲れてはいたが、半年や一年はまだまだ歩く気満々でいるように見えた。

突然、ユッコの顔の前に、自分と同じ年くらいの少女の顔の輪郭が浮かび、その口の部分が開いて、「こんにちは」という親近感のある声を発した。

ユッコは慌ててミカから目を逸らせた。他人から自分の瞳を、これ程までじっくり凝視されたのは何か月ぶりのことだろう……。心臓が少しドキドキ出したのをユッコは感じていた。

ミカはこの日、このサナトリウムへ一つ年上の少女がやってくるという話をすでに聞いていた。所長の説明が終わるまでユッコに声を掛けるのは待とうと思っていたのだが、俯いて下ばかり眺め

ている少女の姿を見てみると、何故だがどうにもいたたまれない気分になって、ついフライングをしてしまったのだった。

「ミカちゃん。まだこっちのお話が終わってないから、もうちょっと待っててね」  
「ごめんさい」

ミカもユッコと同じように心臓に欠陥があった。アメリカで心臓手術をすることは決まっていた。しかし、難度の高い手術のために、その手術を行うことのできる医師の数は限られていた。いつその手術を受けられるのかなど、ミカにもミカの両親にも全くわからなかった。しかし、兎に角はそれまでの間、心臓には極力負担を掛けないようにと、環境療法を信奉する父親の計らいで、通っていた小学校からこのサナトリウムへとミカは移籍させられた。それが三か月前の出来事だった。

入居所で世話をしてくれるのはほとんどが中高年のおじさんやおばさんで、正直、ミカは話がまるで合わなかった。いつ行われるのかもはっきりしない心臓手術当日まで、ここで不毛な日々を過ごすなければならぬのかと思うと、なんだか悲しい思いにミカは駆られた。こうなったらもう、血流を良くするために、お酒をアホほど飲んだんねん。そのせいで背が伸びひんくなくなったって関係あれへん。この心の空虚感つちゆうやつを埋めてくれるんは、きつとアルコールだけやねん。ミカの心は、随分とやさぐれていた。

そんなとき、自分と年の近い少女がここにやって来るといふ話を聞いた。ミカの胸は高鳴った。そして、あまり胸が高鳴りすぎないように、ミカは深呼吸をした。

心臓病専門のサナトリウムであるから、ユッコもまた心臓を患ってここへやってきたということにはわかっていた。しかし、今のユッコの心にどんな重荷が括り付けられているのかといった話は、

所長からの説明にも一切出てこなかったし、ミカはユッコの視線恐怖のことなんて全く知らなかった。だが、例えそれを知っていたところで、やはりミカという少女は、先ほどと同様にユッコの瞳を直に見詰めにいったらう。「友だちになりたい」という純粹な欲求から、その行為は為されていたに違いない。

「ねえ。わたしとお話をして。わたしとお友だちになって。この大人ばかりの世界の中で、ずっとわたしのお友だちでいて」と、ユッコの脳裏に焼き付いていたミカの映像が語り出す。

「人と人とが違うのは当たり前。だけど、いつだってわたしたちは向き合う鏡よ」

ミカのことばかり考えている間に、所長の施設使用に関する概要説明は終わっていた。必要書類にサインを済ますと、

「あとは、早くここに慣れることだね」

とだけ言っ、所長も他の従業員たちも、それぞれの持ち場に戻っていった。

付添いの母親はいくつか確認したいことを思い出したようで、所長の背中に向かって「すみません」と呼び掛け、リノリウムの床を弾ませ小走りに駆けていく。

最早、ユッコが観察できる靴は、脳裏で終始自分に語りかけてくる先程の少女が、今ここで履いている赤い二足のスタンスミスだけになっていた。アディダスはわたしも好きなメーカーだ、とユッコは思った。

人と人とは合わせ鏡なんだと、ユッコは唐突に理解した。

本当だったら、あんな素敵な笑顔を人から向けてもらえた場合、やっぱりわたしも微笑み返さなければいけないのに……。しかし、ユッコは他人と視線を合わせることに対して猛烈な不安感を憶

え、それができない。自分の心臓の鼓動を早めようとする、死と隣り合わせの不安感と付き合っていくよりはと、ユッコは対面の人間が履いている靴ばかり観察することを選択して生きてきた。そして、そんな選択が為されていたことなんて一向に知らない初対面の少女は、屈託なくユッコに話し掛けてくる。

「わたし、ミカ。三か月、私の方が先輩やけど、年はあんたの方が上やんね？　つてことで、ここでの関係はイーブンでええからね。ちなみに、あんたのお名前は？」

「ユッコ」

「ユッコか。あたし、記憶力ええねんで。もう覚えたわ」

ミカは、再びユッコに微笑を差し向けた。

「ほんじゃ、これからよろしくお願いします」と言つて、それからミカは軽く頭を下げた。

ミカの赤いスタンスミスを眺めながら、ユッコはクスリと笑いそうになっていた。「イーブンな関係でいこう」と言つておきながら、ミカが最後に「お願いします」と勿体付けてお辞儀してきたことが面白かった。そして、関西弁のイントネーションはやっぱり音楽みたいだなと、ユッコは思った。豊かな笑いの文化の中で生まれ育ってきたこの子の明るさをしつかり受け止め、それから反射させることができれば、きっとわたしも彼女にとつての素敵な鏡になることができるだろう……。「こちらこそ、よろしくお願いします」

気付くと、その数秒後、そんな表情を浮かべたことに違和感を憶える程ユッコははにかんでいた。こういう風に、誰かに対して笑い掛けたのは、一体、いつが最後だっただろう……？

それから、ユッコは自分の心臓に余計な負荷がかかっているか注意深く観察した。ドキドキし

てはいたが、多分、大丈夫だろうと思った。そして、そのまま翡翠の宝石を装着したようなミカの瞳を見つめていた。なんて素敵で綺麗な瞳の色だろうと、改めてユッコは思った。

ミカについては、「ユッコと年の近い女の子もその施設には入っているそうだよ」と、父親から聞かされていた。しかし、ユッコは最初、何の好奇心も抱かなかった。自分と同様、件のサナトリウムで心臓手術の予約待ちをしているということ以外、一切ミカに対しての情報を求めようとはしなかった。

カラーコンタクトをはめているためなのか、日本人以外の血が入っているためなのか、ミカの二つの瞳は澄んだ緑色をしていた。

「あんなの瞳って、綺麗な焦げ茶色やねんね」

「あなたのは遺伝？ 翡翠みたいな緑色してる……」

「あー、クォーターやねん。お祖父ちゃんがロシア人やから」

あまり笑い慣れていないせいで、口角に歪みの残るユッコの笑顔。ミカはそれを見て、やっぱりこの子と友だちになりたいわ、と思った。ユッコの性格の純真さが溢れ出た、美しい微笑みだとミカはそれを判断した。

二人は、それから七年間をこのサナトリウムで過ごした。

二人は親友になった。



\*

「ほんで、どないしてん、それから？」と、「プロ」は訊いた。

「夜一〇時も過ぎてることだし、ちゃんと部屋に戻って寝なさいって所長は言ってたんですけど、わたしたち、あんまりにも月が綺麗だったから、ずっとそこでお喋りしてたんです。鉄柵の向こう側に広がる山並みも、がさがさと音を立ててなんだか騒々しい夜でした。わたしたちとおんなじように、心臓移植の手術を待ってた男の子が一人いたんですけど、次の日の朝、その子は眠るようなベッドで亡くなってました……。きつと、お月さんが自分のところへ連れてったんだって、ミカはそのとき、悲しそうな顔をして言っていました……」

駅までのシヨートカットロードを二人は掻い潜り続けた。その道中、ユッコが過ごしてきたというサナトリウムの話に、「プロ」はずっと耳を傾けていた。

「難儀やってんやろなあ」と、「プロ」は思った。最初は心臓に何らかの障害を抱えた少女なんだという程度の認識だったのが、ユッコが心臓病専門のサナトリウムにいた当時の話を具体的に知るに連れ、「プロ」が少女に対して抱き始めた同情心はより大きなものに変化してきていた。

本当にこのまま、この少女をあゝ坂道へ連れて行ってもええのやろうか……と、「プロ」は自問した。下りルートで坂道に入ることだけが救いだが、一部では「心臓破りの坂」とまで呼ばれている場所だった。そんなところへ心臓病の少女を突っ込ませるなんて、皮肉にも程があるやろと思つた。この子の心臓はほんまにあの坂道に耐えれんねんやろか……？ 「プロ」の心の葛藤を他所に

して、気付くと、二人は問題の坂へと到達していた。……ここまで来たら、これはもういくしかな  
いねん。おれはいったるわ！ と、「プロ」は、己の不安感を払拭するかのように自分を鼓舞した。  
ぐねぐねと曲がりくねったアスファルトの道。それは鎌首を起こした蛇みたいだった。隙を見せ  
たらすぐにでも襲い掛かってきそうな、獯猛で狡猾な生き物のような坂道が、ユッコの瞳の中でと  
ぐろを巻こうと、鋭く少女を睨みつけていた。

わたしは自らの意思で、これからこの蛇に飲み込まなければならぬ。イブに善悪と知識の実  
を食べるようそのかしたのも蛇だった。イブもアダムもその後、楽園を永久に追放された。だけ  
ど、わたしにとってこれは洗礼。蛇がわたしの心を試そうとしている。わたしはこの蛇に一旦飲み  
込まれて、その体内から脱出した後、ようやくミカに会うことができるんだ。そのために、わたし  
はこの洗礼を受けるっ！

「この坂を全速力で降っていくことが無理やっちゃうことなら、四時までに駅へ到達する話は絵空  
事になるんやと思っとった方がええ。あんた、心臓が悪いとかゆうとったけど、いけるか？」

とどこどころに対向車を確認するための古びたミラーが設置されていたが、全力疾走中にそれを  
確認するのは、相当な神経と体力を削る作業だろう。

それでもユッコは、時間通りにミカと会いたかった。

「わ、わたし……、いきますっ！」

猛烈な動悸音が、自分の心臓内に轟いていることに気付いていた。視線恐怖はすでに克服してい  
たが、あの頃だつてここまでの不安を感じたことはなかった。

時間は三時四〇分だった。「プロ」は時計代わりに使っている、止まった携帯電話の液晶画面か

らそれを確認した。冗談でも何でもなく、この坂をノンストップで降り切ることが、時間までに駅へ着くための必要最低条件だった。この少女の約束を果たさせるため、おれは全力でこの坂を駆け下りてやる！ 「プロ」は誓った。

ドキドキとする胸を押さえながら、ユッコは神に祈りを捧げていた。今日、ミカとの約束を果たすため、わたしは生まれてきました。だからこの約束だけは守りたいの。神様、お願いします。わたしの心臓に二〇分だけでいいから、健全な運動をお与えください。お願いします。お願いします……。

「よっしゃ。時間ももつたいない。心の準備はええか？」

ユッコの焦げ茶色の瞳を見つめながら、「プロ」は明日から入る競馬場での皿洗いバイトのことを考え、それからまた目の前の獯猛な坂道を見下ろした。

「ほんだら、いきまっせ〜」

「プロ」が、どこかの居酒屋のトイレに置いていそうな板敷のサンダルを履いていることにユッコは気付いていた。そして、少しくすんだその黄土色の左サンダルがアスファルトを蹴ると、全体重を乗せた「プロ」とママチャリは蛇に飲み込まれていった。ユッコも、その後を付いていくしかなかった。

オレンジ色の陽光が、キラキラと夕空から降り注がれていた。

\*

ユッコの視線恐怖は少しづつ薄れていく。

心臓が弱いという対して、ユッコは極度のコンプレックスを抱えていた。結局、それが二次的な神経症を誘発させていたのだろうというのが医師の見解だった。だが、ミカという親友をこのサナトリウムで得て以来、ユッコの瞳は開かれた。他人の靴ばかり観察していたその瞳は、今では他人の瞳の中心をしつかりと射抜くようになっていた。

清浄な空気、世間からの隔離、誤解からの擁護、そんなあたりを目的として、このサナトリウムは建てられたのだろう。しかし、その中のどんな理由の一つも、ミカとの出会いがユッコにもたらしてくれた効果には敵わなかった。

一人の愛すべく友人を得て、歪んでいた少女の心は溶解した。

心臓そのものの持つ機能は、もちろん医学的見地から見れば、以前と同様危険な状況にあることに間違いなかった。しかし、その心臓内に宿っている魂は、この地に來て以来、完全に回復の一途を辿っていたのだった。

七年という月日は、ユッコの心にも瞳にも少しづつ明るさを注いでくれていた。ミカと出会えたことで、ユッコの心に輝きが戻ってきていた。

「あたしな、吉本新喜劇に出とった吉田ヒロさんの大ファンやねん。いつつも視聽者のために新ギヤグを披露してくれはってんや。ここで新喜劇が見られへんのは残念やけど、大阪に戻ったら、あ

たし、絶対生で見に行つたんねん」

ミカは、自分の二つの乳首のあたりを、着ていた黒いカーディガンの上から親指と人差し指を使って掴み、

「チチクリマンボ、チチクリマンボ、チチクリマンボでキュツ。キュツキュツキュツキュツ、キュツキュツキュツキュツキュツ、キュツキュツキュツ、キュツキュツキュツ、キュツキュツ！」と、叫んだ。ユッコの瞳を真剣な眼差しで凝視すると、

「おもしろいやろ？」

と言つて、それから微笑んだ。

ミカの話やジェスチャーに、いつもユッコは笑わせられた。ミカが口を開いている間も、ユッコの瞳は、翡翠色をしたミカの瞳にしつかりとフォーカシングされていた。同胞に対しての愛情が、常にミカの表情からは溢れ出ていた。ユッコはミカのその煌びやかな光に照らされるのが好きだった。そして、ユッコのミカに対する光も、しつかりとユッコの焦げ茶色の瞳から反射されていた。

福田サナトリウムで出会つたこの二つの脆い心臓の持ち主たちは、その器官内に宿る居住者たち、つまりは自らの生を司る主たちを、お互いに癒し合つていたのだ。二つの心は同じ周波数を持つ音叉のように、時折、一つの共鳴音の中で溶け合つているようでもあった。

「今夜も屋上いかへん？」

「うん。いいよ」

「風邪引いてまうから、ジャンパー羽織るん忘れたらあかんで」

「大丈夫。わたし、毛布も持つてくから」

サナトリウムの屋上には、夜一〇時までなら出ても構わないというルールがあった。木製の肘掛け椅子が数台設置されており、時折、ユツコとミカはそこへ腰掛け、風に当たった。月光を浴びた。数えきれないほどの夜があつて、星の数ほどの話をした。

神様、本当にありがとうございます。

これまで見上げることなんてほとんどなかった空に向かって、世界を常に見守り続けている天に向かって、ユツコは呟いていた。

「あんた？　なんか信仰しとるん？」

「ううん。でも、神様はいると思うんだ。わたしをあんたに巡り合わせてくれたでしょ。だから、それに感謝してたの、今……」

「ふうん。けつたいやなあ……。でも、ちよつと嬉しかったりもして、てへへ」

「ミカは、この頃すっかり赤味を増してきた長髪を左手で掻き上げ、ちよつとだけ歪なほにかみ笑いをした。

「あたしもあんたと会えて、幸せや」

素敵な友だちをわたしと出会わせてくれて、神様、ありがとうございます。

声にこそ出さなかったものの、ユツコもまた、天に向かって感謝の意を捧げた。

「実は神様って、月の中に住んどんちゃうかな」と、幼稚園の頃に教会のシスターに質問したことをミカは思い出していた。シスターは「あなたがそう思うんなら、きつとその通りなんよ」とミカに返答していた。

色温度の低い月の青い光に照らされて、過去が静かにミカの中から溢れ始めていた。

小学校低学年の頃、それまで騒がしかった教室内が、突然、ふっと静けさに満たされる瞬間があった。そんなとき、「今、天使が通ったんや」と叫ぶクラスメイトがいた。素敵な表現だなと、ミカはそのとき思った。

もしかしたら、本当にたった今、二人の間を天使が通っていったのかもしれない。二人の間は神様に止められたように静寂に満ち溢れ、二人の影は月光によって優しくモルタル床の上へと浮彫にされていた。

\*

乾いた風が頬を撫でていく。

この角を曲がれば、駅まではあと少しだった。

「プロ」は、公園で盗んだママチャリに全身を預け、プロスキーヤーたちが競技場で行う直滑降スタイルのように一切ブレーキに手を伸ばさずに坂道を下っていく。その背中では、興奮したようにギターケースが揺れている。

少女にとって、これは文字通り心臓破りの坂だった。

しかし、この道をショートカットとして利用しない限り、旧友と交わした待ち合わせ時間に邂逅を果たすことはできない。それにしても、心臓手術を済ませたばかりの少女にとって、これはきつい、きつすぎる試練だった。

「ちよ、ちよっと、わたし、もう限界かもしれせんっ！」と、声を張り上げ少女は叫んでいた。

しかし、酔い心地からも今やこの遊戯に楽しみを覚え、頭の中一杯にアドレナリンが分泌してしまっている「プロ」の耳に、最早、その言葉は入ってこない。

「わ、わたし……、し、死んじゃう！」

少女の叫び声は乾いた風に掻き消され、飛ばされていった。

「もう、あとちょっとやで〜！」

「プロ」の声もまた、風に掻き消され、飛ばされていった。

ポーチの中に入っていた携帯電話から、四時を知らせるアラーム音が鳴り出したので、ミカは慌ててそれを止めた。

「ユッコ、そろそろ着く頃やなあ……。ほんまに楽しみやわあ。心臓移植の手術も成功して、めっちゃ健康的になっとんねんやろなあ……」

ユッコが福田サナトリウムを出て行った日、「記念」と言って渡してくれた、昔、デイズニールンドで買ったというストラップを、ミカは親指と人差し指でさすっていた。

「これ見たら、わたしのこと、ちょっとでも思い出してね……。わたしのこと、忘れたら嫌だからね」

「馬鹿。忘れるわけ、あれへんやろ」

あの日のことを思い出したミカの瞳の表面に、うつすらと涙が滲んだ。そして、ユッコの焦げ茶色の瞳が、自分の瞳から溢れ出そうとする涙の存在を発見しないように、一生懸命下唇を噛んで堪えたことをミカは思い出していた。



あと少しでユッコに会える。ユッコは私に会いにここへ向かってきてくれている!

その瞬間、「ドーン!」という、何か大きなものが落ちたような音が鳴り響いた。はっとして音が聴こえてきた方向に目を向けたミカは、自転車の下敷きになって倒れているユッコの姿を発見した。

「ユッコ!」

駅へ着いたと同時に少女が自転車ごと転倒したので、「プロ」は、どないしょっ! と思った。

煙草が吸いたいと思つてポケットに手をつ突っ込んだが、当然、入つていなかった。

「救急車!」

月光町の駅の郊外にポツンと立っていた、一〇代後半くらいの少女が叫んでいた。赤い長髪を振り乱し、物凄い勢いで「プロ」の方へ走り寄ってくる。「プロ」の頭の中に、「赤鬼」という単語が浮かんだ。少女が近づいてくるに連れ、その顔の上に浮かぶ形相の凄まじさと、それとは対照的に澄み切った緑色の瞳がはつきり視認できるようになってくる。

「ユッコ、ユッコ、ユッコ! 大丈夫? すぐ救急車呼んだげるからねっ」

「ミカ……。会えてよかった。間に合つてよかった……。ごめんね……。わたし、時間通りに、どうしても駅まであんたを迎えに来たくて……。ちよっと、無茶しちゃったみたい……。道がわからなかったから、この人に頼んで、駅まで連れてきてもらったの……」

ミカは、少し殺意の浮かんだ表情を「プロ」に向けると、便宜上、「ありがとうございます」と言ったのだが、

「おれの携帯止まってんねんやあ。救急車、呼ばれへん」

と、「プロ」がニヤニヤしながら言ったのを聴き取ると、その顔を力一杯、右手でビンタした。

「ほな、これでかけえっ！」

少女はデイズニーキャラクターのストラップが付いた携帯電話を「プロ」の胸元に投げつけた。

突然殴られたこと、少女が関西弁を喋っていたことなどに酷く混乱していた「プロ」は、間違つて「110」を発信してしまつたが、すぐに「切」のボタンを押し、大きく息を吸ってから吐き出すと、「1・1・9」と、慎重にボタンを押し直した。携帯電話を耳元に近づけて、電話先のオペレーターに、現在地と少女の様子を事細かに伝える。

「ちよつとぐらい遅れたかてかめへんかつたのに。そんなことぐらいでわたしが帰ると思う？ そんな無理したらあかんこと、あんたかてようわかつとつたはずやろ。なんでこんな無茶してん？」

「どうしても遅れたくなかつたの……。元氣なわたしの姿をミカに見せたくて見せたくて……。でも、まさかあんなきつい坂を超えないと、時間に間に合わないなんて思つてもいなかつた……。でも、あの坂を降りてきたからこそ、今、こうやつて時間ぴつたりにあんたに会えてる……」

「ユッコ……。あんたは馬鹿よ！」

心臓手術を済ませたばかりというユッコの左胸に自分の右頬を載せ、涙がその同じ頬を伝わっていこうとするのをミカは必死に抑えていた。神様。お願いだから私からこの子を奪わないでください。私にはまだまだこの子の存在が必要な……。い。

救急車は二分でやつて来た。倒れていた少女は、手慣れた動作の救急隊員たちによって、すぐに

車内へとタンカで運び込まれた。

「会えてよかったな」と、「プロ」。

「ありがとうございます……。こんなことなっちゃったけど……。お陰で間に合いました……。本当にありがとうございます……。あつ、約束してた煙草……。四〇〇円ここにありますが……。どうか、受け取ってください……」

あてがわれた呼吸補助器の向こう側から、少女は声にならない声を発する。

「残念ながらも、お嬢ちゃん……。おれの吸つとる煙草は今月から四四〇円に値上がりしたんじや。四〇円足らへんねん、これじゃあ。煙草買われへ」と言いきらないところに、ミカという少女が再び「プロ」の左頬を思いつ切りビンタした。

「これやるから、お前はもう、いねやつ！」

くしゃくしゃの千円札を「プロ」の顔面に叩きつけたミカ。

少し虚ろな瞳で、しっかりとその光景を見つめているユッコ。

赤く腫れた両頬を、乾いた風が撫でていくのを感じながら、「プロ」は盗んだママチャリに乗って走り去った。

明日、天気になればいいなと願いながら、「プロ」はママチャリを漕ぎ続けた。

「なんやのん？　ほんで、鼻歌歌いながら、ママチャリを途中で乗り捨てて、そのまま家へ帰ってきたん？」

皿にこびり付いて固まったカレー汁や米を、スポンジを使って落としながら、中村は、「プロ」

に問い掛けた。伸ばした髪が汚れた水や何かに付着しないようにと、きっちりと結んだ長髪を、ビームスのシャツの中に仕舞い込んでいる。

「せやねんや。くっしゃくしゃの千円札だけや、おれの手元に残ったんは……。それも昨日、今日の煙草代に代わってしもたんやけどな」

「ちゅうか、お前、その子、そのまま死んでもうたんちゃうんか？ それやったらお前、立派な殺人者やで。何、人殺しといて、自分がぱくったチャリの方だけ完璧に処分して、帰ってきとんねん」  
次から次に回されてくる、牛井やカレライスの盛られていた皿たち。中村の発した言葉の意味を噛みしめながら、「プロ」は、黙々とそれらの皿を洗い続けていた。

「お前は昔っからそうなんや。なんや都合悪いことあると、ほえ〜っちゅうて、そのままどっかいなくなつてまう。小学校ん頃から何も変わってへんな。生きとる価値、ないんちゃう、お前？」  
「なんでそこまでお前に言われなあかんねん」

昼休憩時に一緒に吸ったジョイントのせいで赤く血走った中村の目を、「プロ」は鋭く睨んだ。

「せやつて、おれがゆつたんはみんな事実やんけ。お前、ちよつとでも罪悪感つちゅう奴が心の中にあるんならな、その子がそれからどうなつたか調べんかいっ！ 死んどつたら死んどつたで、お前は一生その罪を抱えて生きるんや。自殺なんかして逃げんなよ。生き続けていくことが、お前の罪滅ぼしや。ほんで、もしその子が生きとるゆうことがわかつたんなら、ちゃんとリンゴとか梨とかバナナとか持つて、お見舞い行つたんねん。ええか。絶対、途中で買つてつたバナナ食べたりとかすんなよ。フリチャうで、これ」

中村の小馬鹿にした発言は、終始「プロ」の心をぎすぎすさせた。しかし、確かにこのまま何の

アクションも起こさず、日常を続けていくのが正しいことだと「プロ」にも思えなかった。そんな生き方はロックじゃない。捨て身の覚悟で、彼女のその後について調べ上げる必要があると、「プロ」は固く決意していた。

\*

二日間のアルバイト代の残り、電話料金の支払い用紙、滞納のために止められていた携帯電話をポケットの中に突っ込んで、「プロ」はその夜、近所のコンビニエンスストアへと足を向けた。

電話料金の支払い処理を店員にってもらっている最中、「プロ」は少女の安否を確認するために、改めて「119」に発信することが、猛烈に怖くなってきていた。中村の言うように、もしもあの子があのまま死んでもうたんなら、おれは間接的な殺人者や……。

「プロ」は、素面のままこの場に立ち尽くしていることに対して、大きな不安感を憶えた。

「すいません。もうちょっと追加で買いますんで、待っててください」

「プロ」はそう店員に告げると、アルコール飲料コーナーへと小走りで駆けた。

戻ってきた「プロ」は、五〇〇ミリリッターのビール六本パックをレジ台の上に乗せ、

「ここで、口開けてもええかな？」

と、真面目そうな眼鏡の店員に尋ねる。

「申し訳ございません。店内での飲食はちょっと……」

「なんやねん。人の生き死にが掛かるとときなんやでっ。ええやんけっ？ あかんのかっ？」

興奮した「プロ」の有無も言わせぬ物言いに店員はたじたじになった。もしかしたら極度のアル中なのかもしれない。暴力を振るわれでもしたら堪らないと、

「わ、わかりました。では、どうぞ」

と、店員は「プロ」にビールの開封を許可した。

「わかってくれたら、ええねや」

と言って、「プロ」は狂気的な笑みを浮かべ、ゴクゴクと缶ビールの中身を飲み始めた。一五〇ミリリッターほど勢い良く飲み干したあたりで、清算処理は終わった様子だった。

「一万九千七六七円です」

プロは二万円をレジ台の上に置いた。はずだった。

しかし、そこには一万九千円しかなかった。

「しもたっ。夕方、煙草こうてんや……。あかん。もう禁煙やな、おれ」

店員は「プロ」のその発言を無視し、レジ台上の一万九千円をもう一度数え直してから、

「あと七六七円です」

と言った。

「プロ」はポケットの中の小銭を全部レジ台の上に乗せたが、明らかに五〇円以上の価値のある硬貨がそこに存在していないことを認めると、

「悪い……。これ返品させてや」

と言って、ビール六本パックの残り五本を、レジ台の脇に寄せた。